

春日神社本殿修理完了！！

狩江のみなさんにとって大切な春日神社。拝殿・中殿・透塀につづき、本殿の修理が昨年完了しました！

修理前



修理後



【沿革】修理前の本殿がいつ頃建てられたかがわかる明確な資料はないものの、かつて同じ吉田藩領だった地域の類例や、境内の石造物から読み取れる情報から、江戸時代後期の文化・文政年間(1804~1830)頃の再建であると推測されています。その後、何度か部分的な修理をされてきたようですが、昭和5年(1930)が記録で確認できる最後の改修となります。当時、小屋組と化粧野地板が一新されていますが、全体の形式や意匠は変更されていませんので、外観には再建当時の面影が残されていました。今回は93年ぶりに行う大規模な修理となりましたが、外観は変更せず、健全な部材はできるだけ再利用することを基本方針として修理していただき、再建当時の面影を引き継ぐことができました。

【修理概要】拝殿等と同様、今回の修理も有志者からの寄付金のほか、国や西予市からの補助金が活用されました。これもひとえに、みなさんが日頃から地域文化を大切にされている姿に、多くの方が心を動かされた結果ではないかと思えます。

-
- 工期:令和5年 6月8日~9月30日
 - 施主:宗教法人春日神社氏子総代会
 - 調査・設計・監理者:(有)酒井設計(宇和島市)
 - 施工業者:(株)千葉工務店(西予市宇和町)
 - 総事業費:27,005,000円
 - ・地元負担額:15,005,000円
 - ・市補助額:12,000,000円
 - ・国補助額:市補助額のうち7,800,000円

ありがとうございました！



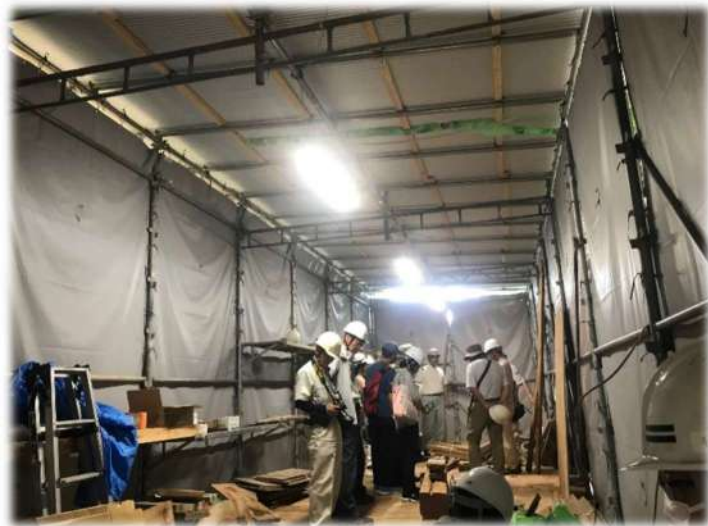
●修理の過程

【公告👉】境内の主要な建物を修理する際には、氏子や利害関係者に対し、行為の全体像を事前に公告しておくことが宗教法人法で義務付けられています。工事前に、右のような掲示板が拝殿前に置かれていたのをご覧になられた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。



【👉工程会議】工期中は、設計士さん、大工さん、建設委員会のみなさん、市職員で定期的に工程会議を行い、工事の状況を確認しました。今回の修理にご協力いただいたのは、前回に引き続き、宇和島の(有)酒井設計さん、宇和の(株)千葉工務店さんで、伝統的な建築物の修理実績があるベテラン揃いです。秋祭りまで工期が限られている中、狩江地区のために精一杯力を尽くしていただきました。

【文化的景観保護審議会👉】西予市文化的景観保護審議会は、専門家5名、地元住民3名で構成されます。市は、文化的景観に関する事業を新たに進める際には必ず保護審議会から指導・助言をいただきながら進めています。本殿も現地はもちろん、設計図や見積書にも目を通していただき、「狩浜らしさ」という点や、春日神社の歴史や履歴に基づいた修理方法のアドバイスがありました。



【👉愛媛県建築士会の研修】「建築士会」とは、建築の設計、監理、まちづくり、工事、行政、教育等、多くの分野で活躍する会員で構成される団体です。県建築士会が開講されている「 Heritage マネージャー養成講座」のうち、昨年9月の回は狩浜で実施されました。本殿の調査・設計・監理を担っていただいた(有)酒井設計さんが講師を務められ、受講生は修理の様子も見学されました。このように、今回の修理は未来のまちづくりを担う方々のスキルアップにも活用されました。

●修理前



全体的に経年劣化とシロアリの被害がありました。場所によってはボロボロに痩せてしまっています…。本殿へ上がる階段の側面は板が外れているし、柱や手すりなどは継ぎ目が浮いてしまっていますね。

大きなヒビが入ってる
ところもあるね…💧

【なおすだけじゃなく…】

もともと、本殿の真横には榊(サカキ)が植えられていました。古来より榊は神事に欠かせない植物ですが、ここに生えていると雨水が枝葉を伝って本殿にかかってしまい、劣化を早めてしまいます。宮司さんや地域の方々で話し合われた結果、今回の修理にあわせて撤去することになりました。ただ修理するだけでなく、傷む原因を取り除くのも大事なことです。



●修理後



【適材適所】ご覧のとおり、傷んでいた部材は綺麗に取り替えられました。調査によると、修理前の本殿は総ケヤキ造りでしたが、(有)酒井設計さんのお計らいにより、今回の修理ではより“適材適所”に。雨水に濡れやすい壁板と濡れ縁には湿気に強いとされるクスノキ、土台には線路の枕木にも使用されるほど頑丈なクリノキが使用されました。今はピカピカの新部材も数年たてば馴染んでくるそうなので、一目でちがいがわかるのも今のうち。春日神社にお立ち寄りの際はぜひじっくり眺めてみてください。



あれ？文化財なのに修理前とちがう木材に変えるのはアリなの？

たしかに、当初材と同樹種・同品質・同寸法のものを使うのが文化財修理の原則なんだけど、そもそも文化的景観は時代に応じて変化しながら形成されたものだから、ある程度の変化は許容されるよ。ここは他の文化財との大きなちがいとも言えるね。

そっか。文化的景観はある意味、“**進化できる文化財**”なんだね！

